
魔法少女リリカルなのは～アルペインの戦士～

骨無野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜アルベインの戦士〜

【Nコード】

N8334L

【作者名】

骨無野郎

【あらすじ】

古くから伝わる最強の戦闘術 アルベイン流。その現継承者であるシュウヤが、様々な出会いと別れを繰り返しながら成長してゆく単純なお話。

全体的にシリアスなお話で構成されるこの物語。

でもどっかで聞いた、見た！！なんていう漫画大好き作者のオマージュが盛り込まれているカオスな自己満足小説。ぶっちゃけ更新停止はすぐ目の前！？ な感じでお送りさせていただく、作者の処女作。

それでもいいと言っ方はぐんぐんちよとした暇つぶしに読んでいた
だけたら幸いです。

第零話（前書き）

ごめんなさい。プロットも碌に考えずに作った文才のない作者の自己満足小説の始まりです。

尚、作中内の時系列等の狂いに関してはオリ要素という事でお願ひします。

第零話

「本日未明、イギリス、アヴァロン空港発916便が離陸直後の海上で墜落した模様です」

「916便には多数の日本人観光客が乗客して「瀬奈!!ワシじゃ!!無事!!」おかけになった電話は現Z」クソオ!!!」

「おじいちゃんどうしたの?」

「シュウヤ……」

「おじいちゃんなんでないてるの? どっかいたいの?」

「違うんじゃない、違うんじゃないよシュウヤ……」

「うん、じゃあぼくがおまじないをかけてあげるね」

「いたいのいたいのとんでけー」

「クウツ、ありがとうシュウヤ。お前のおかげで少し良くなったよ」

「でしょう!これおかあさんにならったんだ!!」

「そうか…そうか」

この時のことはよく覚えてる。

爺ちゃんが涙でグチャグチャになった顔のまま俺をあたたく抱きし

めてくれた。

俺は何も知らずに爺ちゃんに抱かれたまま笑顔を浮かべていただけ。その時になにがあつたとかそんなことは微塵も知らず、ただ爺ちゃんに抱かれていただけだつた。

これが、俺の苦難に満ちた人生のスタート地点であつたことなど知らず…

そう、この日。

俺の両親が死んだ。

魔法少女リリカルなのは〜アルベインの戦士〜 第零話

それから何日か経つたある日。

我が家に俺の両親が先日の飛行機事故で亡くなつたことが伝えられた。

乗客は全員が死亡。遺体を発見することも困難で、例外に漏れず俺の両親の遺体が発見されることもなかった。

爺ちゃんもそれは分かっていたはずだつたが、心のどこかでその小さな希望を膨らませていたらしく、その日の夜も泣き崩れていた。

俺はというと、いきなり両親が死んだといわれても理解する事が出来ずに、ただ一人で遊ぶことしかできなかった。

それから滞りなく両親の葬儀が行われた。

葬式といっても当時の俺には何が何だか分からず、ただ今日は黒い服の知らない人がたくさん来るなど感じたただけだった。

「君がシュウヤ君かい？」

俺がぼうつとしていると知らない男の人が声を掛けてきた。

年齢は俺の父親と同じぐらいに見える逞しい体つきのさわやかな人だった。

「はい、ぼくがしゅうやです」

「おじさんはシュウヤ君のお父さんの友達で、高町士郎っていうんだ」

「おとうさんのともだちですか？」

「うん、シュウヤ君のお父さんとは同じ仕事をしていてね、そこで知り合っただ」

そうなんだと淡々と父親と士郎さんの関係を納得してから改めて士郎さんを見ると、士郎さんの足から茶色い尻尾？のようなものが見え隠れしているのが見えた。

「しっぽ？」

「へ？ ああ、ごめんなシュウヤ君。実は君に声をかけたのはこの

子を紹介しようと思ったからなんだ。ほらなのは、隠れてないで前ににでなさい」

すると士郎さんの足の陰から栗色の髪をした自分と同じぐらいの女の子が現れた。

「…こんにちわ」

ひとみしりしているのか、士郎さんの足の陰から出たものの未だに士郎さんのズボンの裾をつかみながら俺に挨拶してきた。

「こんにちわ!! ぼくのなまえはあまつか・えむ・しゅうや、きみのなまえは？」

「わたしのなまえはたかまちなのはなの」

「シュウヤ君。悪いんだけどもなのはは人見知りでね、まだあまり友達がいらないんだ。是非なのはと友達になつてくれないかな？」

「はい!!」

「よかったな、なのは。それじゃシュウヤ君と一緒に遊んでくるといい。シュウヤ君、なのはと遊んでやつてくれるかい？」

「わかりました!なのはちゃんぼくのへやでゲームでもしよう」

「…わかったなの」

なのちゃんはこの時士郎さんに一度目線を送り、士郎さんのうなずきを確認してから俺の後をトテトテとついてきた。

これが俺となのちゃんの出会いだった。

第巻話

なのちゃんと出会ってからは、ほぼ毎日なのちゃんと遊ぶようになった。

驚いたことになのちゃんの家である高町家は俺の家である天塚家と歩いて五分というご近所様だったのである。

それから俺たちはお互いの家に遊びに行くようになった。

俺の家は基本的に爺ちゃんが忙しいために二人でしか遊ぶことはできなかつたが、なのちゃんの家遊びに行けば、なのちゃんの両親である土郎さんに桃子さん。

お兄さんの恭也さんに、お姉さんの美由希さんの内の誰かがいるので、家で一人でいるよりもさみしさが紛れた。

ちなみになのちゃんの家は俺たちが住む海鳴市で喫茶翠屋という喫茶店を営んでいる。

まだ、オープンしてから間もないためかそれほどお客さんが入っていないらしいのだが、桃子さんの作ったシュークリームを食べたときこの店はきつと大繁盛するなと俺は思った。

他にはなのちゃん家は御神流という剣術（一概に剣術の枠に八メてはいけないが）を継承しているらしく、恭也さんが土郎さんにボコボコにされているのを何度か目撃した。

このころはまだ剣道をしているんだとばかり思っていたが、実際に

はそんな生易しいものではなかった。

通常の刀より短い小太刀と呼ばれる刀の二刀流。

それに加えた体術に、飛針という針を投げる技術。

さらに鋼糸という凄く細いワイヤーを用いる技術。

むしろ忍者だろと言えるような技を伝える家である。

士郎さんはその御神流の技を用いてボディガードの仕事に就いていたらしい。

最初はこのことを知らなかったから、俺の父さんは翠屋の店員をしていたのかと思ったが、どうやら一緒に仕事というのはこのボディガードのほうだったようだ。

ちなみに恭也さんは俺の父さんと面識があつたらしく、たまに縁側で一緒にお茶を飲みながら父さんの話を聞かせてくれた。

恭也さんいわく誰よりも自分に厳しい人で、誰かのために強くなれるそんな人だつと言っていた。

恭也さんに自分にとつてもしかすると父親である士郎さんよりも尊敬できた人だったかもしれないといわれた。

今となつては両親の記憶はほとんど覚えていない。

それが悔しいと思えるぐらい、恭也さんの話す父さんの姿は格好のいいものだった。

そんな両親の葬儀から何ヶ月かたったある日。

その日は俺の家でなのちゃんと二人でかくれんぼをしていた。

なのちゃんの家も庭は大きいし道場なんかもあってそれなりに広いけど、俺の家はそれよりも広くて道場のほかには弓道場やたくさん蔵がある。

かくれんぼをするにはなのちゃんの家よりも隠れるところがたくさんあるので都合がよかったのだ。

その日の配役は、俺が鬼でなのちゃんが隠れる側だった。

家の広さも相まって、なのちゃんを見つけるのは非常に難しかった。とりあえず蔵が乱立しているところにあたりをつけて、俺はなのちゃんの搜索を始めた。

その時だった

『　　ッ　　グゴゴッ　　グゴッ』

「へっ!?!」

地響きのような音が俺の耳に入った。

それは俺の一番近くにある蔵から聞こえているらしく、俺は様子を見に行った。

その蔵の入り口には変な模様が描かれた南京錠が付いていた。

これでは中には入れないと思い、一瞬あきらめかけたが一応鍵がちゃんとかかっているか確かめようと南京錠に触ってみた。

カチツ

ゴトツ

鍵が勝手に開いて、南京錠が地面に落ちた。

この時は驚いたものだった、自分が鍵を壊したのかと思った。

元々、爺ちゃんには蔵のほうは危ないからあまり遊ばないように言われていたから余計に焦った。

だが、

『グゴゴツ』

まだ、蔵の中からあの音が聞こえた。

俺は意を決して蔵の中に入った。

そして、その音の発生元を求めて蔵の奥へ奥へと入って行った。

そして見つけた。

鎖で雁字搦めにされて、台座に突き刺さった一本の剣。

まるでゲームやアニメに出てくるような西洋の剣。

俺はその剣に目を奪われた。

気づくと俺はその剣の柄を握っていた。

その瞬間。

パンッ

雁字搦めになっていた鎖がはじけ飛んだ。

そして…

『グゴッ　　む、よく寝たな』

剣が言葉を発した。

『ふむ、最後に起きたのは何百年前だったか…幼子よ、お前が俺を目覚めさせたのか？』

「きみはなに？」

俺は恐る恐る剣に訪ねた。

『なんと、俺が何かもわからずに目覚めさせたのか！？』

俺ははつなずく。

『よかろう、ならば教えてやる。俺はアルベインが至高の剣、エタ

「ナルソード」

「 銘をディムロスという!!」

これが、俺が運命に立ち向かう力を得た瞬間だった。

第貳話 前編（前書き）

更新遅れました。

やっぱり仕事しながら執筆するのは難しいですね。

第貳話 前編

「でいむろす?」

『そう、デймロスだ』

デймロスは誇らしげに、自分の名前を告げた。

「すげー！ー！ー！ けんがしゃべった！ー！！」

その時の俺はすごく興奮した。

まるでアニメやゲームに出て来るような事に遭遇し、めっちゃくちゃ興奮したものだ。

『興奮しているところすまないが幼子よ、俺は名乗った、お前のはなんと?』

「ぼくのなまえは、しゅうや。あまつか・えむ・しゅうやっていうんだ!」

『了解したシユウヤ。それでここはどこだ?前回眠りに就いた時はだいたい周りの環境が変わっているようで、俺にはわからん』

「ここはぼくのうちのくらだよ!」

『いや、そうではなくてだな…ふむ、ではシユウヤの親はいるか?そのものに状況を聞こう』

「…おとうさんとおかあさんは…いない」

『ふむ、扉から日の光加減を見るに仕事中か?』

「うづん…このあいだしんじゅったの」

『……そうか、悪い事を聞いたな』

「うづん、でいむろすはわるくないよ!?!」

『……』

『ありがとう、シユウヤはやさしい子だな。では、他に一緒に住んでいる者はいるのかな?』

「おじいちゃんといっしょにすんでるよ!?!」

『それでは、シユウヤのおじいさんはいるかな?』

「ごめんなさい、おじいちゃんはいまじごとでないんだ」

『ふむ、因みにいつ頃帰ってくるのかわかるか?』

「きょうはそんなにおいとこキキョウろにいかないっていったから、ゆづがたにはかえってくキキョウなに!?!」

『……どつやら何者がこちらに近づいててきているよじだ』

「わかるの!?!」

『まあ、これぐらいならな。シユウヤ、俺を体の前にかざしておけ、お前に悪意ある者かもしれぬ』

「うん…」

チャキッ

そして現れたのは爺ちゃんだった。

「シユウヤ!!」

「お、おじいちゃん!？」

この時のじいちゃんは額に汗をにじませながら肩で息をしていた。

そして、息を落ち着かせながら俺のほうを見ると目をこれでもかと思開いて、頭を抱えた。

「シユウヤ…まさかとは思いがその剣をとったのはお前か？」

「うん…」

「なんといいことだ…」

爺ちゃんは顔を真っ青にして膝をついた。

この時は自分のせいで爺ちゃんがひどく悲しんだと、落ち込んだものだ。

「ごめん、おじいちゃん…かつてにくらにはいつて」

「…違うよシユウヤ、爺ちゃんはそのことで怒りはしない。そもそもこの蔵には勝手に誰も入れないように封印を施しておいたんじゃない…」

「ぶっいん？」

「そうじゃ、扉に模様のついた南京錠があったじゃろ？あれが封印の役目をしてやった…」

「でもあのかぎはぼくがさわったらかつてにあいたよ？」

「そう、そこじゃ。なぜあの封印がやぶられたのk『御老人。その件については俺から説明しよう』なっ!？」

『お初に御目にかかる。アルベインが至高の剣エターナルソード、銘をデイルロス』

「存じ上げております初代様。この度は私の孫がご迷惑をかけたよっで…」

『よい。それにシユウヤは俺の担い手足りえる者だ、迷惑などあるものか』

「なっ!？ それではシユウヤがここにいたのはやはり!？」

『うむ、俺に惹かれて来たのだろう』

「…これが運命だというのなら、ワシは…ワシは…」

『……御老人、ひとまずここで長話もなんであるう、屋敷に行こうではないか?』

「はい、シユウヤ、ディムロス様を家までお連れするぞ」

「うん、わかった」

そして、俺たちはひとまず家の中にはいったんだ。

この後起こる悲劇など知らず……

第貳話 後編（前書き）

めちやくちや遅くなりました…申し訳ない。
社会人になるって大変です。

第貳話 後編

屋敷内

『それでは現状の把握といこうか』

「はい」

『うむ、ではお互いに自己紹介と行こうか。俺のことは知っているようだが、エターナルソードのデймロスだ。そして、初代アルベイン当主デймロス・アルベインでもある』

「はい、存じ上げております。初代様のことはアルベイン宗家とそれに縁のある家に口伝でのみ伝えられております」

『ふむ、それではお前は宗家縁の者であるということか？』

「遅ればせながら、私のなまえは天塚有人<アマツカアリヒト>先々代当主であるウツドロウ・アルベインの二男であります」

『なるほど、それならばわれのことを知っているもおおかしくはないか…』

『次の質問をしよう。まずここはどこだ？一定レベルの文明をもっているようではあるが、惑星デリスカーラーンとは大分様式が異なるようだが？』

「ここは第97管理外世界、惑星名を地球と言います」

『地球…』

「文明としてはそれなりに発達しておりますが、魔法文化が一切なく科学が発達する世界です」

『…』

二人が話していることは当時の俺にはチンプンカンプンだった。

今ではいやって言うほどわかっている内容ではあるが、いきなり管理外世界だとか惑星だとか、爺ちゃんたちがSFな話をしているのにびっくりしたものだ。

『自分がどのようなところにいるかはわかったが、何故この星に？』

「それは…」

『なにがあった、俺が寝ている間に』

「…惑星デリスカーラインは滅びました」

『何!?!?』

「正確にいえば滅ばされました」

『どついついことだ』

「もう10年も前になります…惑星デリスカーラインで急激なマナの枯渇が始まりました」

『…』

「我々アルベインの戦士はその異常をすぐに察知し、原因を探りました」

「その直後から探索に乗り出したアルベインの戦士が行方不明になりだしました」

「事の重要性を認識した我々は全勢力を以て問題の解決に挑みました。その結果わかったことは何者かが人為的にマナを集めていること、それも異常な速度です」

『その何者とは？』

「…わかりませんでした、しかし奴のせいでアルベインの戦士たちは一部を除き殺されました」

「我々はこのままではまずいと、アルベインと少なからず縁のある地球に宗家に関するものとアルベインが保有する宝物の類を移送しました」

「そして、残ったアルベインの精鋭と奴との最終決戦の結果、我々は敗北しデリスカーラインのマナは枯渇し死の星と果てました」

『…それではアルベインの民は』

「はい、わが家の者と二つの家がこの世界に逃れ、他にも何人かは生き残ったかもしれませんがほとんどのアルベインの民は死に絶えました」

『…なんとということだ』

「…」

『現状は大体ではあるが理解した。次はこれからのことになるが、シユウヤも宗家の血筋であるう、これからアルベインをどうするつもりだ？ 幸いにもシユウヤには素晴らしい才がある』

「…本当なら、孫にはアルベインに関しては何も教えずにこの平和な星でふつうに生きてほしいと思っておりました」

「ですが、もし、あの子が今の平穩を捨て力を求めるのであれば、私は黙って見守るつもりではありません。どちらにせよ初代様を目覚めさせてしまった以上、何も知らない一般人には戻れますまい」

sideデймロス

ふむ、俺が寝ている間にずいぶん状況は変わったようだ。

まさかデリスカーラインが滅び、我がアルベインの民もわずかにこの星で暮らすのみ…

それにしても地球とはな、あまりにも皮肉だ…

だが、この子の才能は異常だ。

おそらく、いろいろ反則だった俺と同等もしくはそれ以上の潜在魔力。

元々俺を目覚めさせるには俺との相性ももちろんあるが、俺を使いこなせるだけの魔力が必要だ。

それをこんな幼い子がいとも簡単に目覚めさせてしまった…

俺としてはどっちでもかまわないが、この子がアルベインの名を継ぐのなら全力で協力しよう。

今は、何が何だか分からない顔をして呆けているが、まあものは試しだ。

『シユウヤ、今の話は難しくよく分からなかったらどう？』

「うん」

『簡単にいこうとな、我が一族はある武術を伝える一族だ。それで、お前にそれを継がせるかという話になったのだが…どうする？』

「うん、ぶじゅつっていたいんだよね？」

『まあ痛いな、自分も使われる側もどちらも』

「じゃあ、いいや。ぼくはいままのままでもいい」

『そうか…だそうだ有人』

「はい、私もそれが一番よいと思います。この子にはやはりこの平和な世に生きることが何よりです」

『ふむ、だがせっかく俺も起きたことだしな、この世界もなかなか

おもしろそうだ。シユウヤこっちに來い』

「？」

『俺の柄を握れ』

カチャッ

カッ

「わっ」

『ふむ、これでよし』

side out

俺がデймロスの柄を掴むと、デймロスの全体が光りだし築いたときに俺の胸に丸いネックレスがついていた。

この時の俺は相当びっくりしたが、これがデймロスが持つ能力の一つである形態変化の応用であったことを知ったのは少し後だった。

「すごい、ねっくれすになった」

『なに、この程度朝飯前よ。俺は他にもいろいろすごいことができるからな』

『有人、俺は今後シユウヤとともにこの世界を見て回る。なに、シユウヤ俺の仕手にでもならない限り碌に何もできないが、子守ぐらいはできるだろっ』

「ありがとうございます初代様。シュウヤも初代様に粗相のないようにな」

「うん！ー！ じゃあでいむろすはぼくとずっといつしよなんだね？」

『うむ、これからよろしく頼むぞ』

「えへへ」

この時のことはよく覚えているというか、絶対に忘れられない。

縁側から差し込む夕日が俺たちを照らし、そして沈んでいこうとしていたからだ。

そう…沈んでいこうと…

ガタッ

「…しゅっくん」

「あ…」

そう、大切なことを忘れていたのだ。

何故俺がディムロスに出会えたのか、何故蔵のほうに行ったのか…

「い、ごめんなのちゃ」「ゆるさないのー！ー！ー！」「ひい！ー！」

この後3時間にわたりなのちゃんのOHANASIを聞かされたのは、今となってはいい思い出だ。

外伝？（前書き）

久しぶりっというレベルじゃないぐらい久しぶりの更新
本当に申し訳ないです。

外伝？

side 士郎

「なのちゃんごっちょごっちょ！」

「しゅうくんまってなの！」

今日はシュウヤ君がウチに遊びに来ている。

元気なのはいいことだ、なのともすっかり打ち解けたようだし・

「しゅうくんまってっていったの……」

「ヒッッ」

……いいことだ。

あいつらが飛行機事故で死んでからもう半年以上が経つ。

シュウヤ君もなのはと遊ぶようになってからは、うつむくことも少なくなかった。

最初のころ……あいつらの葬式が終わったくらいから、あいつらが死んだことに実感を持ちだしたシュウヤ君は落ち込むことも多かった。

やはりなのはと遊ばせるようにしたのはよかったと思う。

とというか、会わせるのが少し遅かったかな。

俺もあいつもここ2年ぐらい裏の仕事が立て込んでたし、なかなか機会がなかった…

そういえば、なのはとシュウヤ君が生まれそうな時も、あいつと二人で仕事だったな…

某国

「まったくの予想外だぜ。護衛任務が謎の集団の殲滅任務になった」

「ぼやくな。手を動かさせ土郎」

「わーってる、よっ！！」ザシュッ

こいつで何人目だよ…

「おい！俺たち確か、日本で子供が生まれるのニヤニヤしてただけなのになんでこんな所にいるんだ！？」

ザシュ

あいつはまた一人斬り倒すところらに振り向いた。

「文句なら、デビットに言え」

やばい、あいつもかなり腹にすえかねてる…

もとをただせば俺の家であいつと今度生まれる子供について話して
いただけだった。

俺は経験があるが、あいつは初めての子供ってことでかなりナイー
ブになっていた。

別に子供が生まれるのが嫌とかじゃなくて、自分に父親が務まるの
か？という不安に苛まれていた。

恭也が生まれた時の俺は特にそんなこと気にしちゃいなかったが、
こいつはこいつでなかなか過酷な人生を送ってきたらしい。

どう元気づけるべきか・・・

と、考えていたときにあいつから電話が掛かってきた。

8時間前

『もしもし、高町ですが』

『もしもし、士郎かい？』

『ん？その声はデビットか？どうした？』

『実は今日 × 国で行われるパーティーに参加するのだが、今日護衛を務めてくれるはずだったローウエル家のものが体調を崩してね、報酬を弾むから護衛を依頼したい』

『やだ』

『即答ッ！？頼むよ士郎！！どうせあいつも暇してるんだろ？いつもの倍額払うから、な？』

『・・・ちよっと待ってる』

とりあえず電話を保留にして、こいつにも意見を聞こう。

「おい、デビットが護衛を頼みたいと言ってるんだがどうする？」

するとあいつはひどく嫌そうな顔をして、

「断る」

つと、切って捨てた。

「報酬は倍額にするといってるが？」

その話をするとう度は思案顔になってブツブツと独り言を言いだした。

養育費とか将来とか・・・

「拘束時間によるな。瀬名も桃子も予定日が近い、できるならばあまりここを離れたくない」

確かにその通りだ、瀬名ちゃんも桃子も出産は初めて・・・

出来ることならばそばについていたいし、こいつもなんだかんだで子供が生まれるのが楽しみでしょうがないという感じた。

「ちょっと聞いてみるわ」

俺は電話の保留を解除してデビットに任務内容の詳細を聞いてみた。

『大して時間はとらせないよ。 × 国なんて自家用ジェットで往復3時間ぐらいだ、パーティー自体も3時間程だし十分日帰りできる内容だよ』

『俺たちの任務はお前の護衛だけでいいんだよな？』

『ああ、大丈夫だよ。一応、結構国のお偉いさん方も来るから会場の警備自体がしっかりしてるし、万一の事に備えて信用できるやつに護衛を頼みたかったんだ』

俺はいったん受話器から口を離して、あいつに内容を伝えるとそれならばかまわないというのでデビットに了解したと伝えた。

それから二十分もしないうちに迎えの車が来たので、装備を整えてデビットと合流し × 国へと出向いたのだが・・・

現在

「何が十分日帰りできるだーーーー！！！！！！」

クソッ！！途中までは良かったんだ、途中までは！！

警備もしっかりしてたし、パーティも盛況であと三十分もすれば終わりだった。

ところが、一瞬で状況が変わった。

いきなり部屋の中央に人影が現れたと思ったらデビットを含むゲスト達の足元に変な模様が浮き上がって、忽然と姿を消した。

とりあえずいきなり現れた侵入者をとっ捕まえようとしたら今度はいきなり黒ずくめの男たちが変な模様から大勢現れ近づけない。

「こいつはやべえな、クソッ、デビットのやつはどこに連れてかれたんだ！？」

「落ち着け士郎。デビットはおそらく無事だ、他のゲストもな」

「なんでわかったよ！？」

「デビットには、やつの居場所と生死がわかるようにちよっとしてお守りを持たせてある。とりあえずは無事だ。おそらく今日の参加者達に用が有ったんだろう」

「おまえいつの間に・・・」

「とりあえずここを切り抜けるぞ」

チツ、とりあえずは目の前の奴らをかたずけねえとな！！

「御神流、高町士郎推して参る！！」

五分後

ふう、とりあえずは落ち着いたな。黒ずくめの奴らも切ったらなんか消えたし、何が何だか俺にはわからん。

だが…

「おい、こいつがお前が行っていた魔法って奴か？」

「…そうだ」

「まったくとんだ反則技だな。気配も全くなく、こんな襲撃されたらいくらなんでも対処しきれん」

「すまない、俺がもっと早く魔力反応に気が付いていれば事前に動けたのだが、どうやら相手はそれなりの実力の持ち主のようだ」

「チツ、とりあえずデビットがどこにいるのかはわかるんだろ？早いとこ救出して日本に帰ろつぜ」

「ああ」

魔法だか何だか知らないが、俺たちがやるべきことはデビットとさらわれた奴らを救出することだ。今は余計なことを考えずに動かないとな。

「外に今日のゲストたちの車があったはずだ、急ぐぞー！」

とりあえず、高そうな車をつらってあいつの指示通りに車を走らせた。

「・・・士郎、ひとつだけ言っておく」

「なんだ？」

「先ほど現れた黒ずくめの奴。あれを相手にするのは構わないが、それを呼び寄せた奴には手を出すな」

「は？なんで？」

「お前じゃ相手にならない」

さも当然のように言いきつたよこいつ・・・

「士郎。お前は確かに優れた戦士だが、それはあくまで魔法とは関係のない世界での話だ。確かにお前は銃を持つ敵にもなんなく勝つ

ことができるが、魔法なんて言う非常識な力の前では無力に等しい」

「・・・お前は違うのか？」

「そつだ。アルベイン流は魔法と格闘術を高次元でハイブリットさせた流派だ。つまり今回のような魔導師との戦闘でこそ真価を発揮する」

「・・・」

「そんな顔をするな、大丈夫だ。僕もの实力は知っているだろう？」

はあ、まったくその自信はどこから出てくるんだか・・・
確かにこいつの实力は知っているが、

「そつ言うが、俺はお前が魔法を使っているところは見たことがないぞ？良いところ”氣”を使った技を見たぐらいだ」

「何だそんな事か、別に今まで使う必要がないから使わなかっただけさ。それに魔導師が相手というなら僕も手札を切る」

そんな皮肉な笑顔を向けられても困るんだが・・・

「了解。じゃ、せいぜい俺は周りの雑魚供を片付けるさ」

- さあ大掃除の始まりだ -

外伝？（前書き）

気がつけば、明日で連載一年。
本当に遅筆ですいません（泣）

外伝？

side 士郎

「どこか？」

「ああ」

俺たちは今、会場から20？は離れた廃墟の前にいる。

あいつがデビットに持たせたお守りとやらから得た情報によるとどうやらこの中にいるらしい・・・

まったく、魔法とやらは一瞬でこれだけの距離を移動しやがるようだ。非常識な連中だぜ。

「さて、ぼちぼち攻め込みますか。黒ずくめの奴ら呼びだした奴はお前に任せていいんだな？」

「ああ、士郎は他の奴らを頼む。もしかしたら魔導師以外にも厄介なのがいるかもしれないからな・・・」

まあ、あり得ない話ではないか・・・

単独犯で今回の騒動を引き起こすには荷が重い。

何かしらの協力者や、リザーバーがいても不思議じゃない。

「まかしとけ。御神の剣士は誰かを守る時に一番力を発揮する。まあ、対象がデビットじゃないまいけどな」

「まったく、ひどい奴だなお前は」

さてさて、それじゃあいつちよやりますか。

side out

side デビット

いきなりだった。

パーティーがもうすぐ終わるところでいきなり目の前の景色が変わった。

気がつけば朽ち果てた部屋の中。

周りには自分と同じように現状がつかめないパーティーの出席者達・

・
いっただいなにが？

「突然の御招待、大変申し訳ない。私の名前はデルソル、今回皆様をこの二次会の会場にご招待したものです」

私を含めた出席者たちが声の主へと視線を向けた。

そこには深紅のローブを纏い、両手を翼のように広げた妖しい奴が立っていた。

「今回皆様をこの二次会へとご招待した目的は非常に分かりやすいものです。是非私のプレゼンテーションを聞いていただきたい」

部屋の中にどよめきが満ちた。

当たり前だ、いきなりこんな意味のわからない状況に陥り、さらにはこの妖しさ満点な奴のプレゼンを聞けとは……

「皆さんお静かに、皆さんに求めることはただ一つ私のプレゼンを黙って聞いて、首を縦に振っていただくだけで結構です」

どよめきが増す。

まるで親が子を諭すような声色で放たれた言葉は、絶対に拒否することはできないとでもいうような内容だった。

横暴だ！ふざけるな！私が誰かわかっているのか！そんな声が出席者の中から上がった。
しかし

ダンッ　ダンッ　ダンッ

紫色の光弾が反論する出席者たちの頭を爆ぜさせた。

「お静かにと言ったでしょう？なに、そんなに時間はとらせません、至極簡単な内容ですよ、是非あなたたちに私たちのスポンサーになつていただきたいのです」

確かに分かりやすい。

ここにいるメンバーは一流企業のトップや政界で活躍している者、果ては小国の王までいる。スポンサーにはうつつつけど……

だが、

「先ほども言いましたが、あなた方は首を縦に振るだけでいいのです。でなければ縦に振るところか首が空を飛んでしまいますよ?」

奴の後ろから身の丈ほどもある大剣を背負った銀髪の男が現れた。男はひどくつまらなそうな顔をしながらも、こちらに殺気という名の威圧感を放ってくる。

同時に、目の前で人が死んでも尚、まだ反論を続けようとする出席者達も発言を飲み込んだ。

「ふむ、皆さん私の話を聞く準備ができたようなので、さっそく私たちの組織の目的を説明していきましようか」

この後は奴の独壇場。

私を含めた出席者達は奴の荒唐無稽な話に付き合わされることとなった……

やれ、私は皆さんの言うところの魔法使いであるとか、世界は次元を超えて複数存在するやら、奴の組織の目的はその全ての次元にある世界を征服することだとか、何処のコミックの話をしているのだろうか、それともこいつの頭の中がハッピーなだけなのか……そんな話を信じられるわけもなく、とにかく出席者達は聞き流しているようだった。

「……どうやら皆さん信じられないようですね?まあ、この世界は魔法文化ゼロの少数派の世界ですし、受け入れがたい事でしょう」
そついうと奴の足元に紫色に光る変な模様が浮かび上がった。

「先ほど天に召されてしまった出席者の方々にプレゼントしたのが魔法なのですが、一瞬で分かりにくかったでしょう?今度はわかりやすいようにゆっくりお見せしましょう」

奴の周りに紫色の光弾が浮かぶ、数は三つだ。

「では」

ダンッ

その内の一発が私たちでも視認できるスピードで、一人の出席者の頭を爆ぜさせた。

会場は再びどよめく。あたりまえだ、理由もなく・・・いや、魔法というもの証明するただけに一人が殺されたのだ。

「次」

ダンッ

また一人死んだ。残る光弾は一発。

「それでは、あなたで締めにしましょう」

奴と目が合う。まったくもってついてない。

ダンッ

光弾が迫る。これで最期か、あつけない人生だった。

俺は目をつぶるとつい先日生まれた娘の顔を思い浮かべる。

すまない、父さんは君になにもしてあげることができずに死んでしまっようだ。

そして今日護衛についてももらった二人への申し訳ない気持ちがあふ

れる。

あいつらも子供がもうすぐ生まれるというのに、急に護衛の依頼をして拳銃の果てにこの様だ。後味の悪い事をしてしまった・・・

無念。

いくら待てども痛みが来ない。それとも痛みも感じず私は召されたのだろうか？

ゆっくりと瞼を開ける。

見えたのは頼もしい二つの背中。

奴は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

ああ、そうか。

「情けないぞデビット、まさか小便は漏らしてないよな？」

「おい士郎、可哀そうなことを聞いてやるな。大丈夫かデビット、僕はちゃんと奥さんには黙っとしてやるよ」

「そんなわけあるか！！！」

俺には死すら切り伏せる、最強の護衛がいたじゃないか。

side out

危なかった。本当にギリギリだった。

デビットにはああ言って茶化したが、内心冷や汗がダラダラだった。乗り込んだのは良いものの下っ端連中に侵入がばれないように時には隠れ、時には一瞬で片づけながら来たが、思ったより時間がかかっちまった。

どうやら相棒も同じだったらしく微妙に顔が引きつってる。

さっきもらしくなく俺の茶化しに乗ってきたしな。

「で、デビット。そこの仮装大賞が今回の黒幕でいいのか？」

「ああ、そいつが今回のホストだ」

どれ。

ほお、さっきまでとは打って変わって良い感じに歪んだ表情してやる。

「君達はいったい何者かな？私は君たちを招待したつもりはないんだが？」

「そいつは悪かったな、いきなりウチの大将が断りもなくいなくなっただもんで、心配になって探しに来たんだ」

「まったく困ったものさ、僕たちがせっかく護衛してやっているのに貴様のようなところについていってしまうんだからな」

いや〜。結局は自分たちの不注意のせいだが、ここはあおっておか

ないとな。あいつも俺の軽口に合わせてくれているし。

「そうですか、それはさぞかし心配させたでしょうね。それでは、もう心配しなくてもいいように、やさしく殺してあげましょう」

ヤバイ！！

奴の周りに、さっきの光弾が無数に浮かんでやがる！！

チツ、とりあえずデビットだけでもどこかに避難させねーと・・・

- 歪められし扉 -

え？

- 今、開かれん -

「【ネガティブゲイト！！】」

「なっ！？」

奴の付近で闇色の薄い膜のようなものが膨張して、その衝撃で奴はぶっ飛ばされた。

まさかこれは、

「土郎、奴の相手は僕がする。早くデビットとほかの連中を連れて逃げる」

相棒が、今まで見たことのない美しい片手剣とダガーの二刀を構え

て言っ。

「了解。詳しい話は後で聞かせるよ!! オラ、デビットいくぞ!!」

「あ、ああ」

後は任せたぜ、相棒。

side out

Interlude ?

とりあえず、士郎とデビットは避難した。

僕の本来の戦い方では、あいつらを巻き込んでしまっ可能性があるからな。

これで、ようやく本気でこいつを潰せる。

「いいかげん、やられたふりはやめたらどうだ？お前が僕の魔術を受ける瞬間にプロテクションを発動させていたのには気づいている」

奴は、フンツと鼻で笑うとゆっくりと埃を払いながら立ち上がった。

「…いやいや、まったく。まさか魔道師がこの星にいるとは思いませんでしたよ。みたところ、ミッドでもベルカでもないようですね？どちらの魔道師で？」

「貴様に答える気はない」

「それはそれは、まあいいでしょう、あなたも多少はやるようですが、早く逃げた皆さんを捕まえないといけないのでね。時間をかけずに終わらせてもらいますよ」

「奇遇だな。僕も早く帰りたいんでね、出し惜しみは無しだ。速攻で決めさせてもらう！！」

地球に来て以来、一度も実戦では使わなかった愛剣に“気”ではなく“魔力”を込める。

放つは我が流派の始まりの技。

・その名も

「【魔神剣】」

魔力を纏った衝撃波が、地を這いながら奴に向かって進む。

「プロテクション」

奴が防御魔法で、魔神剣を防ぐ。だがそれはただの牽制だ。

僕は脚に魔力を込め、地面と足の間で魔力を音もなく爆ぜさせる。

我が流派の戦闘歩方、クイックムーブ舜動術だ。

眼にも映らぬ速さをもって奴の裏に回りこむ。

同時に低く構えた剣を切り上げ、

「【虎牙破斬】」

振り下ろす。

「なめるなあ!!!」

奴を中心に、魔力が爆発する。

僕は、舜動で距離をとり時間を稼ぐための魅せ技を放つ。

「【魔神剣・双牙】」

地を這う二つの牙が奴を襲う。

「アサルトシューター!!!」

奴の迎撃と合わさって粉塵が舞う。

この隙に!!!

・黒曜の輝き、快速の槍となり、敵を討つ・

「避けてみる!!!【デモンズランス!!!】」

闇の魔力を圧縮した槍を奴へと投擲する。

・ゾワッ

まずい、この魔力の高まりは、

「貫け！！アサルトブレイカー！！」

収束砲！？ しかもあの密度のものをこの短時間で！？

デモンズランスが押し負ける。

僕はひとまず舜動で射線から回避する。

「驚きました。精々が魔道師ランクA〜AAと見ていたのですが、その戦闘力と保有魔力はAAA以上はある。油断をするとこちらがやられてしまいますねえ」

「過分な評価はありがたいが、僕は魔道師ランクなんて気にしたことがないんでね」

「いえいえ、過分なんてとんでもない。あなたのその剣技と魔法。まさか、生き残りがこの星にいるなど思ってもいなくて、本当にびっくりしました」

今、こいつはなんて？

…まさか！？

「まったく、あの時念入りに潰したというのに、我々も甘かったというわけですか。主だけは全滅したとは思っていませんでしたが、ほぼ星ごと殺し尽くしたというのに、今更生き残りがいるなんて」

こいつは、こいつらの組織は、

「どうしました？青い顔をして？ <アルベインの戦士>さん」

ブツッ

駄目だ、自分を抑えられない。

こいつは、こいつらだけは…

- 魂すら残さずに殺しつくさなければ -

N e x t I n t e r l u d e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8334/>

魔法少女リリカルなのは～アルベインの戦士～

2011年10月6日10時36分発行